

鳥獣害便り

やまだのかかし

地域の鳥獣害をサポートするサイトです

編集・発行者：山村 準
Tel:0595-63-1725
Email: jyun.y@asint.jp

縄文時代後期に九州北部で始まった稲作は、日本列島各地に広がって定着していきます。ジャポニカ米の栽培は、中国大陸の長江の中・下流域で始まったとされています。稲作の渡来ルートは、朝鮮半島経由、台湾・沖縄経由、中国大陸直と、さまざまな説があります。日本に上陸した稲作は、各地に広がって定着。縄文時代に続く弥生時代は、日本ではじめて「米」が主食となった時代です。縄文時代は、狩猟・採取生活を中心とした食

料採取経済でしたが、弥生時代時代になって自ら食料を生産する食用生産経済へと移行してきます。米の生産量の多少によって、貧富の差が生まれることで、当然人々は生産性の高い土地を獲得したいと思うのは当然です。しかし、その土地を巡って争いが起こるようになります。これが戦争の始まりで、古今東西戦争の原因は土地や富を巡る争いなのです。

野生動物との関わり

日本人は太古から、この国に棲む野生動物とは深く関わりをもつて暮らしてきました。その接点は主に農業に代表される生産活動と狩猟にあったと思います。

獣害の歴史

日本文化を特徴づけるのは稲作文化だという説がありますが、しかし、人類の歴史500万年の間で、人類が狩猟で果たした役割は大きなものがあり、稲作文化と平行し狩猟文化は、東北地方のマガギの世界で連続と受け継がれ、狩猟した獲物の解体の作法や、獲物の供養、解体後の鎮魂儀礼など色濃く残っています。

稲作文化 狩猟文化

日本文化を特徴づけるのは稲作文化だという説がありますが、しかし、人類の歴史500万年の間で、人類が狩猟で果たした役割は大きなものがあり、稲作文化と平行し狩猟文化は、東北地方のマガギの世界で連続と受け継がれ、狩猟した獲物の解体の作法や、獲物の供養、解体後の鎮魂儀礼など色濃く残っています。

また、日本では宗教三県の山間に住む猟師を指しますが、一般でいう猟師やハンターとは違い、マガギ独自の儀式や習俗を持つ猟師のことをいいます。

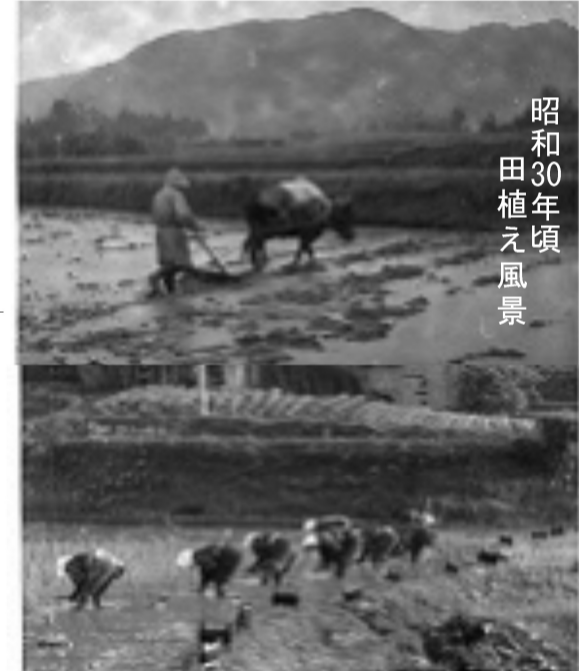


熊祭りの図

東京国立博物館所蔵

儀礼の一つとして、アイヌ民族が冬期に行う「熊祭り」(イヨマシ)が有名で広く知られています。これも熊に対する鎮魂の儀礼です。その精神は、現代のアイヌ文化に類似点を見受けられることができます。

今日、直面している野生動物とのトラブルの原因の一つは「人間の自然保護」で、野生動物の生息域を縮めていることです。これには、人間が生きていくためと言う大義名分がありますが、野生動物の立場から見ると大きな自然破壊なのです。



昭和30年頃 田植え風景



昭和30年頃のサナブリ行事

動物の視点から見た自然の価値観は、本来は動物である人間が生存するために不可欠のものでなければなりません。

科学では解決できない何かがあるような気がしてなりません。縄文時代以来、農業は、風や雨、日照りなど自然災害や病虫害には無力に近く、人々は、自然の中に様々な神の姿を見出し農民は豊作を、山の民は豊猟と山の安全を祈ってきました。

日本は、自他共に認める世界有数の森林大国で、古来より森林がもたらす恩恵を私たちが直感的に、或いは経験的に知っていて森をととても大切にしてきました。

自然崇拜と畏敬の念

日本人は古来より自然を愛し、自然と共存共栄してきた民族で、私達の祖先は森の効用を直感的に、或いは経験的に知っていて森をととても大切にしてきました。

拡大造林政策

昭和20年〜30年代には、日本では戦後の復興のため、木材需要が急増しました。しかし、戦争中の乱伐による森林の荒廃や自然災害などで供給が十分に追いつかず、木材が不足し、高騰を続けていました。こうした状況に対応すべく、政府は「拡大造林政策」を打ち出す。

森林の管理不足

かつての森林では、薪炭林が多く、維持管理は主に萌芽更新にて行われていました。切り株や木の根元から伸びた萌芽が生長し、やがて新たな樹林を構成するという管理方法で、木々の新芽やドン

『農耕儀礼』 『早苗饗』
田の神は、今でも農民の生活と深く結びついたかたちで信仰されている。春には五穀豊穡を田の神に祈り、秋には稲の収穫を喜び、田の神に感謝するという信仰年中行事は、日本の祭りの原点である。山の神は山で、田の神は農村で祭られていたが、いつの頃からか、山の神が春になると里に降りて来て田の神になり、秋にはまた山に登って山の神になる、という伝承が広く信じられるようになった。
『早苗饗』(さなぶり)とは、田植えが終わって田の神を送る行事。当日は、五目飯、炊き込み御飯、朴葉(ほおば)寿司などを作って、竈(かまど)に供えて祭り、家族の者や田植えを手伝った人たちが、共に食べて、無事に田植えが終わったことを祝った。

グリなど野生動物たちのエサが豊富にあり、隠れ家もまた、いたるところにありました。しかし、現代の森林は、拡大造林により天然林が伐採されて餌となる植物、なかでもドングリのなる木が減っています。間伐が遅れるなど管理不足が原因で、林床にまで太陽光が届かず森林の中が暗くなっている森林が多くなっています。下草が無くなると昆虫やそれを餌にする動物も姿を消し、生物多様性が損なわれてしまっています。

里山の再生

日本には、人間と自然が共存するための知恵が伝統的に受け継がれてきた、里山と呼ぶ二次林があり、薪や炭などの燃料や、キノコなどの食料を手に入れる場であると同時に、人間と野生動物を棲み分ける緩衝地帯ともなっています。古来より自然崇拜の対象でもありました。しかし、戦後の高度経済成長期、農村の近代化政策により薪炭燃料から化石燃料中心の生活構造に転換したことが原因で、里山は荒廃し生物多様性が損なわれると共に獣害が多発し、人と野生動物との軋轢が高まっています。山が荒廃することにより、人々の自然に対する畏敬の念までもが希薄になっていきます。荒廃した里山を再生することこそが、今私たちに課せられた

喫緊の課題です。

外来種と在来種 交雑種増殖

外来種とは、もともとその地域にいなかったのに、意図的・非意図的に関わらず、人間の活動によって外国から入ってきた生物を指し「外国由来の外来種」と言い、環境省では生態系に与える被害程度により、特定外来種、侵略的外来種などとランクをつけ被害防除に努めています。また、国内の他の地域から持ち込まれた場合でも外来種と呼ばれ、「国内由来の外来種」と呼んでいます。

渡り鳥など自然の力で移動する動物は外来種ではありません。日本に生息する外国由来の生物の数は分かっているだけで2000種を超えておりその中でも植物が70%以上を占めています。

「助っ人！ 西洋ミツバチ」日本では、西洋ミツバチと日本ミツバチの二種のミツバチが共生していますが、現在はより管理しやすく多くの蜜を集める西洋ミツバチでの養蜂が主流となっていて、西洋ミツバチは養蜂家にとってかけがえのない外来種です。

西洋ミツバチは、日本の自然界には定着できず、人間が家畜のように管理

しなければ生きていけません。反面、日本ミツバチは野生種で自然界には数多く生息しています。

果樹や野菜などの受粉には西洋ミツバチが使われています。ミツバチは受粉用昆虫として園芸農家にとって無くてはならない「助っ人」です。

このように外来種の中でも人間の助けになる種が沢山あります。農業は、動物や昆虫、微生物などの力を借りなければ、人間の力だけでは出来ないということです。

侵略的外来種

反面、外来種の中には、田畑を荒らしたり、漁業の対象となる生物を食ったり、危害を加えたりして、農林水産業に被害を及ぼすものもいます。その中でも生態系や人間活動に影響が大きい生物を、「侵略的外来種」と呼んでいます。

「侵略的外来種」といって、何か恐ろしい生き物と思われがちですが、本来の生息地では、ごく普通の生き物として生活していたのです。たまたま持ち込まれた場所が、その外来種にとって住みやすい環境であったり、餌になるものが豊富にあったりすると、そこに定着して悪影響を引き起こしてしまっただけで、決してその生きも自体が恐ろしいとか悪いというわけではありません。

日本では水中の宝石と言われる錦鯉が、世界各地で侵略的外来種に指定され駆除されているのと同じことです。

侵略的外来種といわれる種は、元々生息していた地域では無害であったり、持ち込まれた地域で、在来種を捕食したり、駆逐するなどして、長い時間をかけて築いてきた生態系のバランスが失われようとしていきます。

国連は、過去50年間に生物多様性と生態系の変動をもたらした主な要因として、「陸と海の利用の変化」「生物の直接的な搾取」「気候変動」「汚染」「外来種の侵入」の5つをあげています。

アライグマ農林被害

アニメの「ラスカル」で人気の高いアライグマも侵略的外来種です。侵入経路はさまざまですが、愛知県犬山市の動物園で飼育されていたアライグマが逸走したことが、国内で野生化してしまっただけでなく、最初のきっかけとされています。アライグマによる農作物被害は全国各地で報告されていますが、なぜか被害額の半分近くが近畿地方に集中していて、兵庫県では平成28年度の捕獲数は約5300頭、大阪府でも約2000頭と、ともに過去最多となっています。

アライグマの侵入経路はさまざまですが、愛知県犬山市の動物園で飼育されていたアライグマが逸走したことが、国内で野生化してしまっただけでなく、最初のきっかけとされています。アライグマによる農作物被害は全国各地で報告されていますが、なぜか被害額の半分近くが近畿地方に集中していて、兵庫県では平成28年度の捕獲数は約5300頭、大阪府でも約2000頭と、ともに過去最多となっています。

外来動物・外来植物 交雑種問題

外来生物がもたらす生態リスクのひとつに異種間交配・交雑問題があります。外来生物と在来生物が交尾をして、雑種をつくるという現象です。

「このままでは紀伊半島のニホンザルがなくなってしまう」。紀伊半島におけるタイワンザルとニホンザルの交雑問題です。そもその原因は、和歌山市内の私立動物園が閉園した際に逃げ出したタイワンザルが野生化し、在来のニホンザルとの異種交配で交雑種を生み出すことによるものです。日本固有のニホンザルと外来種のアライグマ、カゲザルは交雑が可能だそう、異種交配がどんどん拡大していき、純粋なニホンザルは絶滅してしまっています。

山県は、動物保護の面で物議を醸す中、2001年4月、1000人を抽出して県民アンケートを行なっています。動物園で飼育管理するか、安楽死させるかの二者択一形式。結果は動物園飼育管理支持が34%、安楽死支持が64%。よって、タイワンザルを安楽死させる方針が決定し、14年に

捕獲作戦をスタート。長年の地道な捕獲作戦が奏功し、近々タイワンザルの「根絶宣言」が出るようです。環境省は「全国での根絶につながる成果」と評価しています。

しかし、和歌山県だけで排除しても、タイワンザルや交雑ザルが他県のニホンザルの群れに入り込んでくる可能性は大きく、国内全体での交雑の問題解決には繋がらないと思います。

タイワンザルを意図的に持ち込んだのは人間で、持ち込んだ時点で交雑問題が予想されたはずですが、早期に対策をしていれば、大量捕殺をせざるを得なかったのではと悔やまれます。

安楽死といえども生物の命の問題である限り、何が悪いと判断できる話ではありませんが、慎重の上にも慎重を期した対応が望まれます。外来種と在来種との交雑が進むと、日本

の純粋な在来種は雑種に置き換わり、純粋な在来種はいなくなってしまう。自然界での交雑種問題は騒がれている中、牛肉の生産コストの引き下げや肉質の向上を目的に牛の人為的な異種交配が増えていきます。交雑種は黒毛和種などの純粋種に比べて病気に強く、肉専用種より早く大きくなるため、生産コストが低廉化されるといわれています。日本のスーパーなどで販売されている「交雑牛（F1）」の肉のほとんどが「黒毛和種」の雄と「ホルステイン種」の雌の人為的交配によってできたもの

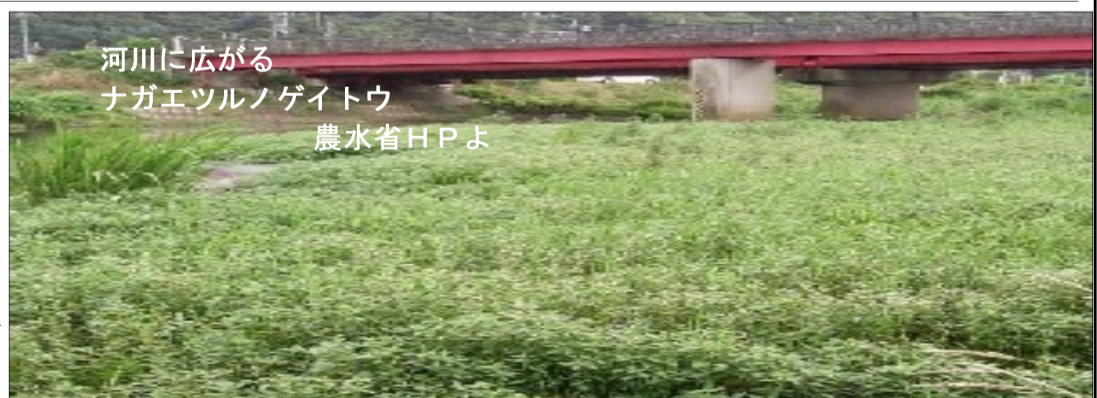
です。

昔から私たちの身近にある四つ葉のクローバーやおなじみのシロツメクサも、牧草として外国からやってきた外来種ですが、すでに日本各地で野生化し帰化植物として定着しています。この植物を外来種だからといって悪くいう人は少ないです。

また、私たちの身近に生えるタンポポのほとんどは、日本産タンポポとヨーロッパ産のセイヨウタンポポとの交雑によって生じた雑種タンポポです。外来タンポポが日本産タンポポの遺伝的特性を取り込むことによって、生まれた雑種はいつぞう日本の環境に適合したスーパー雑種となり、外来タンポポ集団すらも駆逐しながら分布を拡大していることが報告されています。今、「ナガエツルノゲイトウ」という植物が猛威をふるっています。南米原産の多年草で、侵略的外来種に指定さ

れていません。初の確認事例として1980年代に滋賀県で見つかり、琵琶湖など全国各地に拡大しています。今後、危険されるのは稲への影響で、水を張ったところにナガエツルノゲイトウが入ると、畑とは比較にならない速さで増殖し、茎の長さが1メートルを超えるため、稲に覆いかぶさって成長を阻害し、収穫量の減産を引き起こす危険性が高いということです。最近では、動物や植物に人工的な交雑種が増えている、自然に交配したもの

河川に広がる ナガエツルノゲイトウ 農水省HPより



と人為的に交配させた2種類が存在します。人為的に作られた「F1（エフワン）」は、一代雑種で、優良な特性を持った親株同士を交雑させてつくられた一代目の子のことです。人為的に交雑種を作る理由としては、まず優れた種を組み合わせることで、より良い雑種を作ることが目的ですが、「収穫量の多い個体」や「病気に強い個体」を交配させて「収穫量が多く病気に強い雑種」を作っています。しかし、人為的に雑種を作るという行為は神の領域への挑戦です。神の逆鱗に触れないことを願うばかりです。

また、私たちの身近に生えるタンポポのほとんどは、日本産タンポポとヨーロッパ産のセイヨウタンポポとの交雑によって生じた雑種タンポポです。外来タンポポが日本産タンポポの遺伝的特性を取り込むことによって、生まれた雑種はいつぞう日本の環境に適合したスーパー雑種となり、外来タンポポ集団すらも駆逐しながら分布を拡大していることが報告されています。今、「ナガエツルノゲイトウ」という植物が猛威をふるっています。南米原産の多年草で、侵略的外来種に指定されて